

## 保育者養成系学科に在学する短期大学生の授業評価 基準：テキストマイニングの手法を用いた検討

著者	目久田 純一，中岡 千幸，越中 康治
雑誌名	宮城教育大学情報処理センター研究紀要：COMMUE
号	20
ページ	15-18
発行年	2013-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1138/00000315/">http://id.nii.ac.jp/1138/00000315/</a>



# 保育者養成系学科に在学する短期大学生の授業評価基準 —テキストマイニングの手法を用いた検討—

目久田純一<sup>1</sup>, 中岡千幸<sup>2</sup>, 越中康治<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 松本短期大学 幼児保育学科, <sup>2</sup> 筑波大学 保健管理センター, <sup>3</sup> 宮城教育大学 学校教育講座

本研究の目的は、保育者養成系学科に在学する短期大学生がどのような観点から満足度の高い授業と低い授業とを区別しているのかを明らかにすることだった。保育者養成系学科の在学学生 111 名に対して、満足度の高い授業と低い授業の相違について自由記述方式で尋ね、601 件の自由記述データを得た。これらのデータのテキスト内における単語間の同時出現頻度に基づいてクラスター分析を行ったところ、10 のクラスターが見出された。クラスター分析の結果と先行研究結果を参考にして自由記述回答を分類したところ、16 の評価基準が妥当であると判断された。これらの評価基準は、保育者養成系学科以外の在学学生を対象に調べられた先行研究結果とおおよそ一致していたものの、当該短期大学生に特徴的と思われる評価基準も見出された(体験型の授業内容)。また、本研究結果から、当該短期大学生の授業評価基準の構造の階層性も示唆された。

キーワード: 授業評価基準、保育者養成、テキストマイニング、体験型の授業内容、教育内容

## 1. 問題と目的

本邦における学生による授業評価は、1990 年代に大学教育の改革という文脈で積極的に導入されるようになり、2010 年度には 753 校の国公立大学および短期大学のうち 603 校(80.08%)で実施された[1]。学生による授業評価は、各大学において教育業績(教育の質の保証)を示す資料、教員の業績評価、研究費等の予算配分、そして教育改善のための検討資料として用いられている。これらの用途の中でも、教育改善のための検討資料として活用されることが最も多い[2]。実際に、尾関・山田・末本・青野[3]によれば、彼らの研究の分析対象となった大学教員 124 名のうち 75 名が、学生による授業評価の結果を参考にして教育改善を行ったと回答している。

学生による授業評価の結果を効果的に教育改善へと結びつけるためには、授業に対する学生達の評価基準を考慮した授業評価尺度が必要である。学生の授業評価基準について報告しているいくつかの先行研究[4、5、6]を概観すると、主に 6 つの評価基準が挙げられる。すなわち、理解のしやすさ、集中している(学んでいる)という実感、教員の授業技術(方

法)、内容のまとまりとおもしろさ、教員の話題性、そして授業に対する充実感である。

上述した 6 つの評価基準はおおよそその先行研究において一致しているものの、所属する学部および学科による評価基準の相違もわずかながら見受けられる。例えば、初等教育を専攻する学生に対する調査では、「実際の教育現場の話を聞くことができた」等といった実践的な授業内容であるかどうかの評価基準の一つに挙げられている[4]。初等教育を専攻する学生の多くは、将来は教育者になることを念頭に置いて授業を受けているだろうし、在学中に実際の教育現場における実習にも従事しなければならない。そのために、彼らは、必然的に、実際の教育現場で役立つ情報を得られる授業に対して高い評価を与えると考えられる。以上のことから、学生による授業評価基準には各々の在学する学部や学科の特色が多かれ少なかれ反映されている。

そこで、本研究は、保育者養成系学科に在学する短期大学生を対象にして、同学科の短期大学生における授業評価基準について検討することを目的とする。

## 2. 方 法

参加者 A 県の私立短期大学において保育者養成系学科に在学する1年生と2年生を対象に質問紙調査を行い、111名(男性36名、女性75名)から回答を得た。調査に回答した者の平均年齢は18.95歳( $SD = 1.13$ )だった。

調査内容 3頁から構成されるA4サイズの調査冊子を使用した。1頁目はフェースシートで、本調査の目的と注意事項を記載し、性別、年齢、そして所属学科を尋ねた。2頁目の上部には教示を記載し、以下16項目に回答を求めた。そして3頁目では19項目に回答を求めた。

手続き 調査は2010年の7月上旬に授業時間の一部を利用して実施した。はじめに、本調査の目的を、大学において満足度の高い授業と低い授業の違いがどのような点にあるのかを調べることでであると説明した。次に、本調査の注意事項として、調査に協力するか否かは回答者の自由であること、回答内容は成績や参加者に対する評価とは無関係であること、回答の匿名性が保護されること、そして回答の保管および破棄の方法と使用目的を説明した。最後に、調査冊子の2頁目上部を参照しつつ次のように教示した。すなわち、“この大学で受講した授業において、あなたにとって満足度の高い授業と満足度の低い授業とでは、どのような点で違いがありましたか？どのようなことでも構いませんので、以下に、思いつくかぎり自由に記述してください。なお、回答の際には、なるべく「満足度の低い授業に比べて、満足度の高い授業は…」の後につづく形で記述してください。また、授業科目名や個人名は書かないように注意してください”。なお、調査に要した時間は約10分であった。

## 3. 結 果

収集されたデータに対してテキストマイニングを行い、その結果と先行研究結果を参考にして自由記述

式回答の分類を行った。

松村・三浦(2009)を参考に TinyTextMiner (0.70 for Win)と R(2.11.1)を用いて分析を行った。はじめに、収集された自由記述回答 601 件(ひとりあたりの平均回答数は5.41件;Range = 1—18)のそれぞれについて形態素解析を行い「名詞」「形容詞」「動詞」を抽出した。同義語の異表記を統一するように処理した上で、出現頻度の累計が全出現頻度の50%以上になることを基準に分析対象語を選出した。その結果、出現頻度が9以上の33語が分析対象となった。なお、33語の出現頻度の累計は779であり、これは全出現頻度の51.78%だった。

これらの33語間の関連性を解析すべく、テキスト内における単語間の同時出現頻度に基づく主成分分析を行い、ここで得られた主成分負荷量を用いてクラスター分析を行った。ユークリッド平方和を用いて単語間の類似度を算出し、Ward法を用いてクラスターを結合したところ、10のクラスターが認められた(表1を参照)。

各クラスターがどのような評価基準を示しているのかを検討すべく、先行研究結果を踏まえて自由記述を分類した。その結果、504件の自由記述(全自由記述の83.86%)が16の評価基準のいずれかに分類された(表1を参照)。

## 4. 考 察

本研究は、保育者養成系学科に在学する短期大学生の授業評価基準について検討した。本研究結果と先行研究結果[4、5、6、8]を比較すると、おおよその評価基準が一致していた。すなわち、②声の聞きとりやすさ、③興味関心の実感、④実践的な授業内容、⑤話し方と話の上手さ、⑥教員への好感、⑧双方向的な授業、⑩板書技術、⑪理解している実感、⑫説明の配慮、⑬楽しいという実感、⑭集中している・学んでいるという実感、そして⑯資料等の適切な

活用といった、12の評価基準については先行研究においても類似した基準が見出されている。

これに対して、本研究では、新たに①体験型の授業、⑦体験談の話、⑨学生への尊重、そして⑮記述作業の多さといった4つの評価基準が見いだされた。

このことから、新たに見出された5つの評価基準は、保育者養成系学科の在學生に特徴的な授業評価基準であるかもしれない。特に、①体験型の授業は、保育者養成系学科の在學生に特徴的な基準である可能性が高い。当該学科では、運動、身体表現、芸術

表1 クラスター分析の結果、およびそれを参考にした自由記述の分類結果

クラスター 分析の結果	推測される 授業評価基準	自由記述の一例	自由記述の件数 (全体に占める比率)
1 動かす 身体	① 体験型の内容	実技が含まれている／みんなで一つの作品を仕上げる／グループワークがある／実践がある／歌を歌う	29件 (4.83)
2 とる 聞く 声	② 声の聞きとりやすさ	はっきりした声で聞きとりやすい／話を聞き取るのが困難／大きな声で話す／聞きとりやすい声で、何を言っているのか分かりやすい	10件 (1.66)
3 持てる 内容 興味	③ 興味関心の実感 ④ 実践的な授業内容	内容がおもしろい／授業の内容に興味を持てる すぐに使える内容／実習で実際に試せる内容	40件 (6.66)
4 上手 話し方 話 教員 おもしろい	⑤ 話し方と話の上手さ ⑥ 教員への好感	自分のことと教科書などの内容をバランスよく話している／教員の話が単調ではない／おもしろい雑談がある 教員がおもしろい／教員に好感を持てる／教員が親しみやすい	92件 (15.31)
5 話す 体験談	⑦ 体験談の話	教員の体験談なども話す／内容に基づく体験談も話している	12件 (2.00)
6 学生 意見	⑧ 双方向的な授業 ⑨ 学生への尊重	学生にも質問したり発言させる／教員が一方的に話していない／学生と関わりながら進行していく／学生も声を出す 学生の意見を取り入れる／学生一人ひとり平等に接してくれる／気持ちを理解してくれる／話をしやすい	38件 (6.32)
7 見る 黒板 字	⑩ 板書技術	字が綺麗／板書のまとめ方が上手／重要なところを赤などで書く／黒板にいきなり書きだして、ノートをとるのか分からない授業は困る	21件 (6.98)
8 分かる 説明	⑪ 理解している実感 ⑫ 説明の配慮	納得して話が聞ける／内容が分かりやすい／要点がわかりやすい／結論がはっきりわかる 話の道筋がきちんとしている／重要なところを2回言う／身近な例えで言ってくれる／語句など細かいところまで説明がある	78件 (12.98)
9 楽しい ない 眠い 時間 自分 集中 入る	⑬ 楽しいという実感 ⑭ 集中している・学んでいるという実感	授業が楽しい／自分でやっていて楽しい／飽きない／退屈しない 集中している／やる気がでる／意欲的に取り組む／眠くならない／時間の経過が早い／達成感をとても感じる／自分の役に立つと思う／自分自身のためになっていると感じる／授業の終わった後の充実感／内容がよく頭に入ってくる	122件 (20.30)
10 書く 多い プリント 使う	⑮ 記述作業の多さ ⑯ 資料等の適切な活用	たくさん書く／終始鉛筆を動かしている／書くことと聞くことが半々くらい／だらだらとした文章を書き写すことがない プリントなどの授業の準備がしっかりできている／プリントが穴埋め式／視覚教材での授業が多い／スライドで写真などがある／質問が書けるプリントを配っている	62件 (10.32)

表現、そして音楽表現といった実技系の科目の比率が高く、これらの他にも手作り玩具の制作や保育活動の考案といった学生が主体的に取り組む教育内容も数多く設けられている。つまり、このような教育内容の特徴が、従来の研究では報告されていない体験型の授業といった評価基準の出現と密接に関連していると推測される。

なお、本研究結果では、教員の話し方や板書技術など客観的な 10 の評価基準が見出された一方で、主観的な 6 つの評価基準も見出された。すなわち、③興味関心の実感、⑥教員への好感、⑨学生への尊重、⑪理解している実感、⑬楽しいという実感、そして⑭集中している・学んでいるという実感である。これらはいずれも客観的な評価基準を満たした上で、2 次的に満たされる評価基準であると考えられる。たとえば、理解している実感が喚起されるためには、②声の聞きとりやすさ、⑤話し方と話の上手さ、⑩板書技術、⑫説明の配慮、および⑯資料等の適切な活用がある、といった評価基準がある程度満たされる必要があるだろうし、学生への尊重を感じるためには⑧双方向的な授業の基準がある程度満たされる必要があるだろう。

このような授業評価基準間の階層性については、牧野[8]によって報告された、授業内容や教員の授業態度を高く評価した者達は低く評価した者達よりも授業満足感が高いという結果からも推測される。しかしながら、学生による授業評価基準間の心理学的構造を示す明確な知見はなく、今後の検討が必要である。

## 引用文献

- [1] 文部科学省: 大学における教育内容等の改革状況について(概要) (2011).
- [2] 天野智水, 南部広孝: わが国の国立大学における学生による授業評価の展開, 大学論集, 35 集, pp.229-243 (2005).
- [3] 尾関美喜, 山田政寛, 末本哲雄, 青野 透: 大学教員を対象とした授業改善の現状に関するケーススタディー, メディア教育研究, 6 巻 (2), pp. 14-20 (2010).
- [4] 長谷川勝久, 原田由香里: 教育系大学の学生を対象とした授業満足度アンケート項目の開発, 日本教育工学会論文誌, 30 巻, pp.447-452 (2007).
- [5] 細川和仁: 学生の授業評価観点に関する事例研究: 教職課程科目「教育課程論」を対象として, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 30 巻, pp.143-157 (2004).
- [6] 星野敦子, 牟田博光: 大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係, 日本教育工学会論文誌, 29 巻, pp.463-473 (2006).
- [7] 松村真宏, 三浦麻子: 人文・社会科学のためのテキストマイニング, 誠信書房 (2009).
- [8] 牧野幸志: 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係: 専門必修科目「人間関係論」の場合, 高松大学紀要, 35 号, pp.17-31 (2000).